

ドクター内田の ジャズは神様



織維会社の社長さん渡辺健之助氏のありがたいお誘いをいただいて、さっそくその夜おつかがいすることに。何しろ事情は切迫していつのんびりできる状況ではない。名古屋の白壁町に近く戦争



渡辺健之助氏

をまぬかれた一角のお宅は、黒扉に取り囲まれてお屋敷という名にふさわしい落ち着いたたたずまいで学生の身にはちよっぴり入りにくかった。茶菓のもてなしをして下さった控えめの夫人との二人暮らしらしかったが、和服姿にくつろいだ渡辺さんは、緊張で硬くなっている僕を解きほぐすように気を配りながら書斎に案内して下さいました。そこで目に入った光景は—僕を

うならせるに十分だった。「こりやすこいや〜」壁一面の書棚には、文学、詩集、画集などがぎっしり並べられ部屋の主人の教養と趣味の良さを物語っていたが、何よりの驚きは入り口近く

にすらりと並

渡辺氏は神様!

んだLPのコレクションだ。何せ国産LPなんてまた売ってない時代なんですぞ。隣にはどっしりした外国製の電音だ。

（オーディオなんて言葉は似合わないな）がさりげなく置かれ、いかにも使いこなされている雰囲気だ。

でも感嘆したのはそれだけではない。そのコレクションが、ジャズを深く聴いて

いなければ目につくはずもないアメリカのマイナーレーベルで占められていたからなん号順に。

今、目の前にすらり並んでいるんだねえ。それも見事に番号順に。

大体、僕も初めはアメリカ人なら皆ジャズが好きだろうなって考えていた。でも日本人だっただれもが歌舞伎や民謡を好む訳ではない。特に戦後、ニューヨークを中心に黒人たちが起こしたジャズの革命（「ビバップ」と呼ばれた）は内容的に高度な鑑賞音楽を目指したために、ビッグセールを期待するメジャー（例えばコロムビアとかビクターといった会社だけ）はそその紹介に熱心ではなかったといえる。

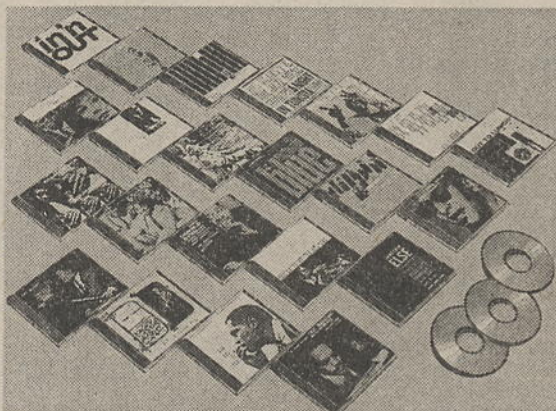
つまり、一九四〇年代から五〇年代のモダンジャズ発展期を支えるように、意欲的な新人たちの作品を次々に取り上げてくれたのは中小企業に

あたる「プレス・ティッジン」「ブルーノート」「リバーサイド」といったマイナー・カンパニーだったのだ。もちろん、そのころの僕には、ただ読んで覚えた知識に過ぎなかつたが、その実物が

レコード提供を快諾

にこやかな表情で時々うなずきながら耳を傾けて下さった渡辺さんは、「クラブのこ」とは人づてに聞いていて一度聴かせてもらおうかなんて考えていたんですよ。私のレコードがお役に立つなら、何も遠慮はいりません。好きな時に好きなだけ持っていって自由にお使い下さい。」まるで神様みたいだった。が、今の僕にあんな立派なことを言えるかなあ。

(内田 修)



「ブルーノート」の旧盤はCDで復活した